

思ひ草

第26号

平成30(2018)年6月27日 発行

子どもたちの学力向上

人間開発学部教授 よしかわ 吉川 しげお 成夫

全国的な学力調査が毎年実施されるようになったのは、およそ十年前の平成19年4月からです。正式な名称は、全国学力・学習状況調査といいます。私は当時、文部科学省と国立教育政策研究所の学力調査官を務めていて、調査方法の検討や問題作成の準備などにあたっていました。同じ時期に文部科学省の教科調査官という職にもついていたので、教育課程の基準である学習指導要領の改訂(平成20年告示)の仕事も同時進行しており、かなり忙しかった記憶があります。

なぜ調査を行うのか。その目的は、子どもたちの学力向上に役立てるためです。ペーパーテストやアンケートの回答により、一人ひとりの子どもの学力や学習の状況を把握します。その結果を分析し、全国的なデータと比較することで、各学校での授業や学習活動をよりよいものにし、学力の向上に役立てようとしています。そのために原則として、小学校6年と中学校3年の全員が調査に参加しています。

学力や学習状況の全体的な傾向も明らかになってきています。例えば、算数・数学では、子どもたちは計算問題については比較的成績がよいのです。小学校では、整数や小数、分数

の四則計算を学習します。中学校では、正の数や負の数、文字の式も含めていろいろな計算を学習します。そうした中で、一部の計算問題については、間違いが多く見られます。例えば、「 $5 + 2 \times 4$ 」という二種類の計算がまじった問題(正しい答えは13)では、28という誤りをする小学生が多くいます。

別の調査の結果もあわせてみると、「 $5 + 2 \times 4$ 」の問題は、はじめて学習する小学校4年生での成績がよくて、5年、6年に進級すると、成績が低下してきます。その一方で、中学では成績が向上していきます。これを見ると、4年生で学習し身に付けた知識や技能が、練習の不足などにより次第に剥落(はくらく)していくが、中学生になると知識を活用する場面が多くなるので、再び定着するようになると考えられます。

そうしたことから、学習指導の進め方を改善したり、教育課程そのものを見直したりする手がかりが得られます。大規模な調査を毎年実施するには、学校の先生方や子どもたちの協力をはじめ、多くの人手や予算が必要となりますが、その重要性は大きいといえます。

雨の日だからこそ

人間開発学部教授 ゆうき 結城 たかはる 孝治

雨の日はつつい外出するのも億劫になりがちかと思えます。幼稚園や保育園の子どもたちも雨の日が続くと屋内での過ごす時間が増えてくる季節です。実際、私も朝起きて天気予報を確認して雨だと、なんとなく出勤も気が重いです。この原稿を家で書いている今もしとしと雨が降っています。

いつ頃から雨嫌いになったのかと思い返してみれば、高校時代くらいからではなかったかと思えます。高校時代は電車通学をしていたので、梅雨のこの時期、ただでさえ蒸し暑いのに、車内も満員で、天井に付けられた回転式の扇風機も熱気を拡散させる程度の効果しかなく、かなり不快な気持ちで電車で揺られていたのを思い出します。

もう少し時間を遡って回想してみると、雨に対する不快な思いよりも、「ああ、こんなことして遊んだな」という思い出がよみがえってきます。雨の日だからこそ遊びや発見がたくさんあったことを思い出しました。

台風で、友達とずぶ濡れになって下校した時、パンツからまるで雑巾のように水が絞れて友達と大笑いしたこと。排水溝に葉っぱを流して誰のが一番早く流れるかを競争したときのこ

と。たらいやバケツ、ビンや缶に雨水が溜まるのには、とても時間がかかり、どれもだいたい同じ時間がかかるということ。雨の降り始めには、「雨の匂い」がするという。午前中の虹は西の方に見えるということ。雨に濡れた公園の滑り台はとてもよく滑るということ。雨の日は羽虫がいなくなるということ。近所には雨の日でも絶対に濡れない場所があり、そこが秘密の集会場になるということ、などなど。

ちょうど息子が学校から帰ってきました。

「遊びに行ってきます!」「どこに?」

「里山!」「いってらっしゃい。気をつけてね」

長靴に雨合羽。傘の代わりに虫取り網。夕方、家に帰ってくるときには、ビショビショのドロドロだと思います。あとで一緒にお風呂に入ったときに、「雨の日の冒険談」を語って聞かせてくれることと思います。私なんかよりも体験から学ぶことのほうが多いのかも。そういえば、ルソーもそんなこと言ってたっけかな。子どもにとっては、雨の日もすてたものではないようです。

教育実習が始まりました

5月から3年生の教育実習が始まりました。2年生の時に教育インターンシップをした学校で実習する人、母校で実習する人、教育委員会の指定によって配置された人などさまざまですが、学生は子どもたちとの出会いに緊張感をもって臨んでいます。今号は健康体育学科の様子です。

教育実習を3年次に実施することの メリットとデメリット

健康体育学科准教授 川田 裕樹

教育実習巡回指導において学生の授業を参観している、大学の授業では教室の後方で隠れるように座っていた者が、「(まだまだ不十分であるにせよ)人前でここまで話せるようになったのか」と感心することも多い。また、教育実習を終えた学生と授業やゼミなどで教育や子どもなどの問題について、より深く意見を述べたり考察したりできるようになっている学生が大幅に増えることから、多くの学生にとって、実習はとても貴重な学びの場になっていることが想像される。

本学部の多くの学生は3年次に教育実習に挑む(学部としてもカリキュラム上、3年次に教育実習を行うことを勧めている)。3年次に実習を行うメリットとしては、①教育現場において実際に肌で感じた問題点などを大学に持ち帰り、その後の学びに繋げることができる、②進路を検討する際に、自分が教師に向いているのか否かについて早い段階で気づける、といったことなどが挙げられるだろう。また、③3年次に実習を行った方が、その後の教員採用試験のための勉強を早期から進めやすい、といったメリットもあるかもしれない。

一方で、いくつかの問題点も挙げられる。例えば、①大学での学びが十分でないまま教壇に立つことになってしまいがちである、②3年次は履修すべき授業も多いため、実習中はかなりの数の授業を欠席せざるを得なくなってしまう、といったことである。

当然のことではあるが、大学の授業での学びがあるからこそ、教育実習という実際の教育現場において深く考察することができるし、現場での課題を大学に持ち帰って、より深い学修に繋げることができる。大学の授業と教育実習との学びの往還をどのようにしてより良いものにしていくか、そしてそのために3年次に実習を行うことのデメリットをどのようにして改善し、メリットを生かしていくか、さらに検討していくべき課題であると感じている。

教育実習で学んだこと

健康体育学科 3年 下関 咲

私が教育実習を経て学んだことは「生徒に何を伝えたいか明確にすることの大切さ」です。私が体育実技の授業を担当させていただいた「バレーボール」は生徒たちにとって中学校で習う初めての機会であったため、一からバレーボールについて教えなければならない状況でした。初回の授業では、生徒たちは初めて聞く単語や活動内容に戸惑っている様子が見受けられ、私自身も自分が実施した授業を振り返った際に、生徒たちの中に何が残ったのかを掴むことができませんでした。生徒たちの中に「アンダーハンドパス」「オーバーハンドパス」という単語や動作が頭の中に残っていたとしても、どのような時に使うパスなのかがわからなければ、生徒はゲームにおいてボールが来ても動くことができません。実際に、授業後に生徒に記入させた振り返りシートを読んでみると、「アンダーハンドパスが難しかった」「繋げるのが難しかった」というような大雑把な内容ばかりで、やはり指導したことが断片的にしか伝わっていなかったことがわかりました。

そこで、指導教員の先生に相談したところ、「その日1番伝えたいことを設定し、それにそって練習を組み立て、練習ひとつひとつにどのような意味があるのかを明確にするように」とアドバイスをいただくことができ、それ以降は、このことを意識して授業を組み立てるようにしました。すると、自分の中でもその都度伝えたいことが整理でき、生徒がこれまで以上に深くバレーボールを学習し、バレーボールのおもしろさを味わいながらプレイしている様子が見られるようになりました。

このように、生徒に何を伝えたいか明確にすることの大切さを、今回の実習を経て学ぶことができました。次年度には小学校での教育実習があります。次年度の実習の際も、生徒に何を伝えたいのかを明確にし、それを揺るぎないものとする、そして、毎授業後に生徒に伝えたかったことが残るような授業づくりを心がけていきたいと考えています。

教育インターンシップ

2年生の学生が5月から教育インターンシップを始めています。初等教育学科106名、健康体育学科32名、子ども支援学科68名の計206名が、小学校、中学校、高等学校、幼稚園、保育所、施設等で学んでいます。

児童の新しい一面に出会うこと

初等教育学科 2年 長井 友花

私は現在、母校である江戸川区の小学校で週に一度教育インターンシップに行っています。個性豊かな児童の多い2年生の学習のお手伝いをしながら、毎回貴重な体験をさせていただいているなど感じます。

先日、児童の人間性に触れた出来事がありました。2人の児童が同時に泣き出してしまい、私はどちらの児童のそばにいてあげればよいかと困ってしまいました。その時、一人の男の子が「俺が、〇〇ちゃんのことみてるから、先生あっちの子みてあげて。」と声をかけてくれたのです。普段は教室を抜け出したり大声をあげてしまったりする児童なのですが、その時その児童の優しさに触れ、友だち思いな面に気づくことができました。一人一人の内面を理解するということは、こういったことなのかなと学ぶことができました。

このように、インターンシップでは毎回児童の新しい一面に出会うことができます。児童と学び合いながら、一つ一つの経験を生かしていけるように、私も成長していきたいと思っています。

教育インターンシップで感じたこと

子ども支援学科 2年 鳴島 由紀乃

私は、2～3月に認定こども園で約20日、教育・保育ボランティアをさせていただきました。5月からは同じ園で週1日、教育インターンシップをさせていただいています。

こうして同じ園に行き続けているのは、私が幼稚園に通っていた時の担任の先生がいらっしゃるからです。私は、入園当初、母親と離れるのが嫌で、登園から降園まで1日中泣いていました。しかし、元気で明るく面白い先生のおかげで幼稚園が大好きになり、今こうして保育者を目指しています。13年ぶりにお会いしましたが、大好きだった先生の姿は今も変わりなく、同じ園で活動できることをとても嬉しく感じています。

自分が先生側の立場になり改めて考えると、子どもたちの気持ちをくみとり、一人一人に対応する先生の大変さに気付かされました。また、活動中わからないことや悩んだことがあった時すぐに相談でき、優しくアドバイスをくれる先生の存在は、今でもとても心強いです。憧れであり保育者の理想像である先生のような保育者になれるよう、頑張っていきたいと思っています。

教育インターンシップを通して学んだこと

健康体育学科 2年 中山 溪斗

私は現在、横浜市の中学校で教育インターンシップ活動を行っています。週に一度、主に、個別支援学級を担当させていただいており、日々活動を通じて多くのことを学んでいます。また、5月半ばに行われた2年生の宿泊行事にも参加させていただき、教員の立場としてとても貴重な経験を得ることができました。

今回の宿泊行事を通じて私が学んだことは、教員の責任の重要性です。中学生は大人のように見えて、まだまだ幼いと感じることが多々ありました。常に生徒に目を配り、体調や環境など様々な面に配慮をし、生徒をサポートしていかねばならないことや、万が一の時には迅速に対応をして教員間で連携し合うことなど、普段とは全く違う環境だからこそ人として、そして一指導者としての責任というものを強く感じることができました。

インターンシップ活動は大変と思うときがあります。しかし生徒と関われる喜び、達成感実際の現場を体験してこそ味わえるものだと思います。今回得た経験を今後の活動に活かし、理想の教員になれるよう努めていきたいと思っています。

傍らで見守る保育の大切さ

子ども支援学科 2年 鈴木 茉里奈

私は現在、保育園で活動させていただいており、毎回、異なる年齢のクラスに携わっている。これまでの活動の中で、2歳児クラスに携わった時、私の中で大きな気づきがあった。

おやつの後、使ったコップを自分の巾着袋にしまうという場面で、私はある男の子を見ていた。その子は、手が滑ってしまいコップを中にしまうのが難しい様子であった。一生懸命に頑張るその子を見て、私は手を貸さずにそばで見守っていた。男の子は何度も挑戦し、最終的には自分の力でできるようになった。「よし、できた!」とその子はとても喜んでいて、自信がついた様子だった。この時私は、子どもの主体性とねばり強さを感じ、「自分でできた!」という気持ちを育むことの大切さに気づくことができた。同時に、「そばで見守る保育」の重要性を知ることができた。

このことから、保育者は子どもとの距離感をうまく使い分け、子どもが持っている力が発揮されるよう働きかけていくことが大切であるということ学んだ。これからも、視野を広く持って子どもの状況に応じて柔軟な対応が取れるように頑張りたいと思った。

教員を目指す学生が実践的に学ぶ場

～教師塾

教師塾とは、各自治体の教育委員会が大学生を対象に行っている学びの場です。大学生が新規採用教員となった時、その自治体の教員として活躍できるようになるための資質・能力を育成しています。学生は、大学での学びに加えて教師塾で学び、実践的な指導力や柔軟な対応力を身に付けています。内容や研修期間は、各自治体によって異なりますが、学校現場での実習、研修センターでの講義や演習、地域や企業での体験活動など、さまざまなプログラムが用意されています。同じ教員を目指す他大学の学生と共に学び、交流できることも一つのメリットです。

今年度も、以下の教師塾に本学の学生が参加し学んでいます。教育実践総合センターでは、教師塾に入るための相談や入塾選抜の指導をしたり、教師塾で実習をする学生の学校を訪問し授業を見たりして、学生の学びがうまく進むように支援しています。

- ・東京都 東京教師養成塾
- ・埼玉県 埼玉教員養成セミナー
- ・横浜市 よこはま教師塾「アイ・カレッジ」
- ・神奈川県 かながわティーチャーズカレッジ
- ・川崎市 輝け☆明日の先生の会
- ・千葉県 教職たまごプロジェクト
- ・相模原市 さがみ風っ子教師塾



東京教師養成塾研究授業

平成30年度の予定をお知らせします

- 7月31日(火) 14:00～
第1回教育インターンシップ連絡協議会
- 8月4日(土) 13:00～
人間開発学部10周年記念事業 第10回夏季教育講座
特別支援教育実践フォーラム
『特別支援教育の今日的課題
～一人一人の願いを実現する教育を目指して～』
- 10月28日(日) 10:00～
共育フェスティバル
「結」～人を結ぶ・心をつなぐ～
- 12月25日(火) 14:00～
教育インターンシップ 報告会
第2回教育インターンシップ連絡協議会

平成30年度の スタッフ

- ◆教育実践総合センター
- センター長 成田 信子
- 副センター長 夏秋 英房
- 担当 小笠原優子
銀杏 陽子
唐沢はるみ
塩谷 香